

く殊に紋理の緻結色で緻密

用途 建築材 家具材一般工芸材料

4. 成 果 調査の結果、南九州産材の性質を把握し、工業用木材への利用に役立つものと思われる。今後充分研究の余地があり、九州工芸部会において概略発表の機会を得た。

(2) 木竹材の染色

1. 担 当 工業技師 松田健一

2. 目 的 竹材の染色は、塩基性染料、薬品着色に頼っているが、耐候性に劣る欠点を有するので、これの適切な染料の研究として反応性染料による竹材への応用を検討し、最良の染色条件を見出し合理的、化学的染色が行われるよう試みた。

3. 概 要 (1) 竹表皮の前処理

染色性を向上させる方法として、薬品(NaOH)による前処理をするが、その時の竹の材質変化に対する影響を観察し前処理の最適条件を測定した。

(2) 反応染料と染色

レマゾール染料 (ヘキスト社)

(染色法)

原料に対し適当な染料をとり熱湯に溶解し染液をつくり、材料を入れたのち、助剤を添加し80°Cの温度にて60分間煮沸十分発色させたのち、とり出し水洗い乾燥する。

(3) 竹材の内外皮の染着性

内皮は無処理でも10~15%染着力を有する

表皮は黄色系の染料程、竹材と親和力をもち鮮やかな色調を呈する、又未処理の場合殆んど着色を期待出来ぬが助剤を加えると向上する

処理材に染色工程にて助剤を与えると発色は促進される5%程度の吸着性を望みうる

4. 成 果 反応染料による竹材表皮に対しての染着力は良好であるが単独染色は無理で前処理が大切であるが、この場合表面の損傷を防ぎ靱性を低下させるおそれのない処理条件を更に検討したい。

(3) 人工柶の試作研究

1. 担当者 工業技師 松田健一

2. 目 的 従来、家具材とくにセットものを作るにあたり、同一樹種の素材が、その